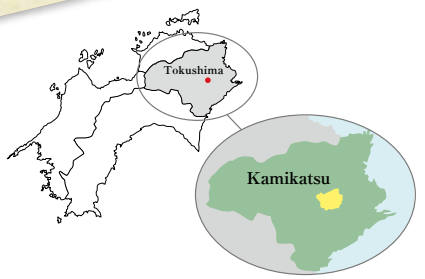
支部見聞録（四国支部）

From 徳島県 上勝町



「葉っぱビジネス」が変えた町

徳島県の山の中の小さな町が、近年地域振興や高齢者問題に光明を投げかける存在として、熱い視線を浴びている。その柱となっている「葉っぱビジネス」とは、そしてその成功がもたらしたものとは――。先見的なその取り組みを訪ねよう。

▲山上から見下ろした上勝町の中心地

▲「彩（いろどり）」ブランドのつまもの。
左から紅葉もみじ、南天、赤柿葉

過疎と高齢化の町に生まれた彩（いろどり）事業

徳島市内から車で約1時間。山の中を延々と走った先に上勝（かみかつ）町はあった。農産物の拡販や町の営業企画を担う第三セクター㈱いろどりの広報担当 滑川里香さんに、町を見渡せる場所があるかを訊ねたら、車1台がやっと通れるほどの急な林道をひたすら上へ。ようやく視界が開けた山上にも棚田と集落があり、山々の連なりのはるか眼下に町の中心エリアが見えた。徳島県勝浦郡上勝町は、標高100メートルから700メートルの山間に大小55の集落が散在する。2012（平成24）年の人口は1,886人972世帯、高齢者比率が48.7%という過疎化と高齢化の町だが、「つまもの」と呼ばれる料理に添える葉っぱや花、山菜などを「彩（いろどり）」ブランドで全国に出荷し、年間売上2億6千万円。生産農家は約200戸で平均年齢は70歳と高齢の女性が中心だが、年間1千万円を売り上げる家もあるというから驚きだ。この彩事業は地域活性化の観点から非常に注目を集め、事業を切り開いた、いろどり代表取締役 横石知二さんは講演に引っ張りだこ、町には日本のみならず世界37カ国から視察の人々が訪れ、視察者数は多い時には年間で町の人口の倍近くにも及んでいる。また、2012（平成24）年秋には葉っぱビジネスを巡るドラマが映画化もされた。

「一番嬉しいのは小遣いをやれること。ひ孫が8人おるからな」。お話をうかがった日に90歳の誕生日を迎えた針木ツネコさんは、彩事業を手がける喜びをそう語った。早期から彩に取り組んだツネコさんと息子さん夫婦の元には今は孫夫婦とひ孫も戻ってきて、4世代が隣り合った家に暮らしている。「子や孫がUターンした家は何軒もありますし、都会に住む孫のマンションの頭金を出したおばあちゃんもいますよ」と滑川さんは言う。

現場を大切に、仕組みをつくる

彩事業が大成功をおさめた陰には、種も仕掛けも、また横石さんの血がにじむような努力も山ほどあった。横石さんが上勝で営農指導員になったのは1979（昭和54）年、20歳の時。当時は産業も乏しく若者はどんどん町外に流出し、町は暗い空気に淀んでいたという。その上、1981（昭和56）年には冷害で主要産業だったみかんの木が軒並み枯死した。当面の現金収入を確保しよう

「彩」が提供するつまものが、料理に四季を美しく演出する▶

取材・写真協力／株式会社いろどり

▲針木ツネコさん。つまものは小さくて軽く、高齢者や女性に扱いやすい

▲彩事業を学びに来ていた地元の小学生たちからは、活発な質問が飛びました

と農家が自家用に作っていた青物野菜を徳島市の市場に出したり、椎茸や高冷地野菜など新しい特産品育成などに全力で取り組む一方で、いつも頭には「高齢者や女性にもできる仕事はないだろうか」という思いがあったという。横石さんが偶然のきっかけから小さくて軽く、力のない者でも扱いやすい「つまもの」の可能性に気付いたのは、1986（昭和61）年のこと。当時つまものは料理人が山で調達していた時代で流通はほとんどなく、上勝の人たちには「葉っぱがお金に変わるのは狸か狐のおとぎ話」といわれた。実際当初は売れなかったが、活路は現場にあった。自腹を切って足繁く料亭に通い、どんなサイズのどんな葉が求められているのかを調べ、農家にも教えて規格を徹底。全国の盛り場や温泉地を回って料理店や旅館に売り込み、次にその地の市場に「注文がこれだけ来るから」と対応を依頼して販路を拡大していったという。

「つまものを売る」といっても、ただ葉っぱや花を山で採ってくるわけではない。農家は品質向上のために丹誠こめて手入れをし、正月や雛祭りなど必要な時期に適度な大きさや咲き具合になるように知恵をこらし、中にはハウス栽培する人もいる。品目の総数は320種にものぼり、全国の市場からの注文に農家が応札して農協に品を持ち込み、出荷する。他産地の参入が盛んな現在でも彩の地位が揺るがないのは、培ってきた品質の高さと注文に必ず応じて圧倒的な信頼を得てきたからだ。

高齢者が頑張れる仕組みを作ったことも成功の鍵だ。彩事業ではまず町の防災無線ファックス、次にパソコンによる情報システムを導入。ファックスで市場からの注文情報を一斉に伝え、早い者勝ちで電話応札するシステムが負けん気を刺激した。パソコンは高齢者でも使いやすいよう、トラックボールとテンキー主体の専用キーボードで操作し、電源を入れれば自動的に彩の情報ページが表示される仕掛けだ。パソコンの画面には売れ行きや単価、市況など、見て得をする情報が表示される。農家は値動きや売れ行きを予測し、何をどれだけ出荷するのかを考えるようになった。また、各農家の売れ行きと順位も出るので、競争心がやる気に火をつける。現在ではタブレット端末も導入し、お膳立てをしたいろどりのスタッフも驚くほどの早さで普及が進んでいるという。「とにかく仕組みをつくることがとても大切です。そしてそれにはICTが欠かせません」と横石さんは言う。

▲映画撮影地を示す観光客向けの案内板

▲農家ごとに出荷数や売り上げなどをバーコード管理している

▲タブレットで発注状況が一目瞭然

▲出荷作業をするのも女性が多い

みんなが役割を果たせる社会へ

以前は出番のなかった高齢者や女性たちが稼げる仕事を得て自分の「役割」を見出し、さらにテレビの取材や視察で町外から人が訪れるようになって、大きな変化が町に生まれた。自信や故郷に対する誇りを取り戻し、生活にハリが生まれて何より高齢者たち自身が元気になったのだ。いたわられ護られる立場から、自ら考え動いて仕事をし、税金を納める主体的な存在へ。産業が仕事を作り、仕事が生き甲斐を生み、介護にも医者にも縁遠くなる状況を横石さんは「産業福祉」と呼ぶ。実際高齢者が多いのに上勝には寝たきりの人はほとんどおらず、医療費も低い。また町にとって過疎化を押しとどめ、後継者たる世代を増やすのは重要な課題だが、産業が生まれて町の魅力が知られるようになり、Uターンはもちろん Iターンも増加して両者で町の人口の1割を占めるほどになっている。

横石さんは「生きていく上では、地域＝コミュニティ、生活＝幸せ感、経済＝仕事の3つのバランスが非常に重要」で、それにはやはり「自分なりの役割を見つけること」だと語る。皆が自分の役割を果たし、いきいきと能動的に生きられる上勝町のあり方は、日本にとってはもちろん高齢化に向かう世界にとって大きな意味をもち、何よりの指針となるに違いない。

▲広報のために作成された冊子。左から2人目が横石さん

別冊 FROMはウェブサイトへ

eふぁみり もあわせてご覧ください!
http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/

ゴミや資源の無駄ゼロを目指している上勝町。全国から注目の取り組みとは?